

肺炎球菌感染症の予防接種を受けましょう

<対象者>

生後2ヵ月から60ヵ月に至るまで(5歳となる日の前日まで)の間にある児 ※沖縄市に住民登録をしている方

<接種スケジュール>

接種回数:最大4回 ※接種開始時や接種日当日の月齢・年齢により、接種回数と間隔が異なりますので、事前によく確認してから接種を受けましょう!

接種開始月齢	接種回数と間隔
生後2ヵ月～ 生後6ヵ月	初回接種: <u>27日以上</u> の間隔をおいて 3回 (標準的には1歳になる前までに) 追加接種: <u>1歳以降に、初回接種終了後60日以上</u> の間隔をおいて 1回 (標準的には1歳～1歳3ヵ月の間) ※初回2回目・3回目の接種は2歳になる前までに行うこととし、 <u>それを超えた場合は行わないこと</u> (追加接種は可能)。 ※ただし、初回2回目の接種は1歳になる前までに行うこととし、 <u>それを超えた場合は初回3回目の接種は行わないこと</u> (追加接種は可能)。
生後7ヵ月～ 生後11ヵ月	初回接種: <u>27日以上</u> の間隔をおいて 2回 (標準的には1歳になる前までに) 追加接種: <u>1歳以降に、初回接種終了後60日以上</u> の間隔をおいて 1回 ※初回2回目の接種は2歳になる前までに行うこととし、 <u>それを超えた場合は行わないこと</u> (追加接種は可能)。
1歳	<u>60日以上</u> の間隔をおいて 2回
2～4歳	<u>1回のみ</u>

ヒブ・肺炎球菌について

ヘモフィルス インフルエンザ菌

ヒブ(Hib: *Haemophilus influenzae type b*)や肺炎球菌は、人の鼻や口から体内に入り、鼻やのどの粘膜にすみつきませんが、そのまま何の症状も引き起こさずにいることも多い細菌です。

しかし、何かのきっかけで脳やせき髄を包む髄膜、肺などの体の内部に入りこむと、命にかかわる重い感染症(細菌性髄膜炎、喉頭蓋炎、菌血症、敗血症、肺炎など)を発病する場合があります。これらの細菌は、多くの子どもたちにとって、のどや鼻の奥にすみついている身近な菌のため、重い感染症について、誰が、かかるかわかりません。

「Hib(ヒブ)ワクチン」と「小児の肺炎球菌ワクチン」の両方を接種して、怖い細菌感染症からお子様の命を守りましょう。



細菌性髄膜炎について

細菌性髄膜炎は、ヒブや肺炎球菌などの細菌が、脳やせき髄を包む髄膜の奥まで入り込んでおこる病気です。発熱・頭痛・嘔吐が3大症状ですが、初期は発熱や嘔吐など風邪や胃腸炎の症状とよく似ていて、特徴的な症状はみられません。特に乳幼児では、はっきりとした症状がないため、なかなか判断が難しいと言われています。症状が急速に悪化し、高熱やけいれん、意識障害が出て初めて診断がつくことが多く、早期の診断が大変難しい病気です。細菌性髄膜炎に最もかかりやすいのは、免疫力が未発達な2歳ぐらいまでの小さな子どもです。年齢とともにかかりにくくなりますが、5歳未満は危険年齢です。

細菌性髄膜炎にかかっても、早期に診断がつき治療薬の効果があれば、無事に回復することができます。しかし、薬の効果が無い菌(耐性菌)が増えているために、治療が難しく、死亡や脳障害・難聴・精神発達遅滞などの重い後遺症が残ってしまうことがあります。

細菌性髄膜炎の原因となる細菌(起因菌)はいくつか知られておりますが、多くはHibと肺炎球菌が原因と言われています。

○小児の肺炎球菌ワクチンの副反応

注射部位の赤み、しこり、はれ、痛みや発熱、不機嫌、食欲不振などで、これらは通常数日以内に自然に治ります。まれに重い副反応として、ショック、アナフィラキシー(じんましん、呼吸困難、血管浮腫、顔面浮腫、喉頭浮腫等)、けいれん(熱性けいれん含む)、血小板減少性紫斑病などが報告されています。

○予防接種による健康被害救済制度について

定期の予防接種後に起きた健康被害が、予防接種によるものと国で認定された場合には、予防接種法に基づく補償(医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料など)を受けることができます。

沖縄市役所 子ども相談・健康課 予防係 TEL 939-1212(内線 2232・2233)

※この説明書の情報は平成28年4月現在のものです。